

上野殿御返事

弘安二年八月八日 五八歳

鷺目一貫・しお一たわら・蹲 鴟一俵・はじかみ少々、使者をもて送り給び了んぬ。

あつきには水を財とす。さむきには火を財とす。けかちには米を財とす。いくさには兵杖を財とす。海には船を財とす。山には馬をたからとす。武蔵・下総には石を財とす。此の山中にはい糸のいも、海のしほを財とし候ぞ。竹の子・木の子等候へども、しほなければそのあぢわひつちのごとし。又金と申すもの国王も財とし、民も財とす。たとへば米のごとし。一切衆生のいのちなり。ぜに又かくのごとし。漢土に銅山と申す山あり。彼の山よりいでて候ぜになれば、一文も千文もみな三千里の海をわたりて来たるものなり。万人皆たまとおもへり。此を法華經にまいらせさせ給ふ。

釈まなんと申せし人のたな心には石変じて珠となる。金ぞく王は沙を金となせり。法華經は草木を仏となし給ふ。いわうや心あらん人をや。法華經は焼種の二乗を仏となし給ふ。いわうや生種の人をや。法華經は一闍提を仏となし給ふ。いわうや信ずるものをや。事々つくしがたく候。又々申すべし。恐々謹言。

八月八日

日 蓮 花 押

上野殿御返事